



## 置いてきぼり

### きたの だいち

寿命が尽きたのだろうか。パソコンのプリンターのことである。活字のかすれやずれが次第にひどくなってきた。家の用で使っている分には、さほどのものをプリントするわけでもないことからやり過ぎしてきたが、年賀状の時節を迎えるころとなって、その思いがいつそう強くなってきた。年式はたしかに古い、とはいえ十年にはまだ間があり、取り立てていうほどには使っていないのだが。

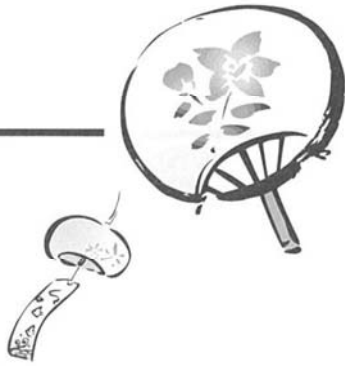


包み隠さず打ち明けるとそれに拍車を掛けるようなことがある。年賀状の通信面を刷るべく望みの品質に設定すると、さして込み入った文面ではないにもかかわらず一枚プリントするのにやや三分間も掛かってしまい、まともに立ち向かうと都合三十時間も費やされることから、不本意ながら品質レベルを落として使っていた。これで、ちょうど一分短縮できたが、そうしてからでさえ所要時間は二十時間にもなり、掛かりつきりで二日半も要してい

た。じつくりと腰を据えるしかなかった。本を読み始めてみたり音楽を掛けながら臨んだ。給紙できるひと纏まりの分量が仕上がるまでに、小一時間も待っているのだから、まどろみ、うたた寝をすることに。もなる。それでも、まあそんなものか、とのんびり構えているのだが、一枚の宛名面を刷るにも一分間はみなければならなかった。

量販店に赴き、頃合いの機種に目星をつけたが、御目当てのものは接続部の仕様が最新のものに切り換わってしまい、繋げないことが分かった。気を取り直して手持ちのパソコンに接続できる機種を方々さがした。繋ぐことができるのは一機種しかなかった。意中のものは手にできず、しかも値段は倍になってしまった。

だが、鼻歌交じりで包みを解き、机上に据えてケーブルを接続した。こうなると大人も子供も一緒だ、と自らをあざけりながらソフトウェアをコンピュータにインストールし始めたが、ハードディスクの空き容量が足りないという。たくさんの手紙



## 徒然 つれづれ

や資料をごみ箱に放り込んでみたが、空き容量の上からはほとんど効き目がなかったことから、普段、師と仰ぐ婿殿に教えを請いながら、プリンター側の機能を厳選し、甚だしいほどまでに容量を抑えた。これでようやくインストールできた。さっそくA四版での試し刷りである。またたく間に排紙トレイの上に流れてきた。音は立ったのだろうか。もちろん年賀状にもプリントしてみた。たしかに速い。そのスピードは秒針に目をやるまでもなかった。いまだきのプリンターは速くて静かなばかりか、デジタルカメラからのものを始め、スキャナーやファックス機能までもが組み込まれるなど隔世の感がある。



この年齢までになると物欲そのものが失せてくるようだ。十分ではないにしても一通りの物が揃っているのも一因だろう。宝くじにでも当れば揺り動かされるに違いないが、氾濫する商品情報には徐々に目を疑らさなくなり、壊れてしまってから店

を訪れるケースが多くなった。そのせいか、どきつとさせられたり、ええっと思うことにたびたび出会う。

スーパーなどの駐車場で、周りには誰もいないのに、がしゃつというようなやや鈍い音がして、うん？ 何があったのかなときよろきよろさせられたり、朝の通勤途上などでこれまた人が乗っていない車のエンジンが、出し抜けにぐるると掛かり、一瞬、おおっ！ と声を上げながら肩をすくませ飛びのかされた。がしゃつという施錠やその解除音は、さほどのこともないのですぐに慣れたが、不意のエンジン起動音には誰もがそうであろつがその都度驚かされる。だが、エンジンの遠隔始動は、運転席で寒さに打ち震えながら暖気することを考えると、ありがたい仕掛けを考えたものだ。持ち主を見掛けたら、この果報者め！ と目を細めながら肩口の辺りを小突いてやろつと、かねがね思っているのだが、敵は悠然と朝食を摂っているに違はなく、表には出てこないのだからどうもいかない。もつとも、見ず知らずの人のだが…。

